一筆

参議院の選挙制度

崇城大総合教育センター教授
今井 亮佑

2019.3.7

7月に予定される参院選から新たな制度が適用される。主な変更点は次の二つである。一つは、埼玉県選挙区の定数を2増とした点。もう一つは、非拘束名簿式の比例代表選挙に「特定枠」を設け、定数を4増とした点である。

私は、この制度改変は功罪相半ばすると考える。1点目については、いわゆる1票の格差への当座の対処法として肯定的に受け止めている。現行の選挙制度の下で、これ以上「合区」を作ることなく、人口が減少している地方の県選出議員を確保しつつ1票の格差問題に対処するには、選挙区選挙の総定数を増やすよりほかないからである。

他方、2点目については野党の批判とは異なる理由から問題があると考えている。野党各党の批判の論拠は、自民党の党利党略による制度改変だという点にある。しかし、定数4増は自民党のみを利するものではないこと、「特定枠」の導入は党の独自性を打ち出すのに使えることから、党利党略との批判は妥当ではない。むしろ、非拘束式に拘束式の要素も加えることで、比例代表選挙の制度を複雑にしたことが問題だと考える。

選挙ごとに特定の弁護士グループが1票の格差をめぐる訴訟を提起し、司法が厳しい判断を下すということが続く限り、早晩現行の選挙制度は行き詰まりを見せるだろう。二院制の下で衆参両院にどのような代表を送り込み、どのような代表制民主主義を実現するのか。この理念に基づき、参議院だけでなく衆議院の選挙制度も含めて、抜本的な改革を行わねばならない時期に来ているのではないか。

2019年3月7日　熊本日日新聞　夕刊　P.1

一筆

憲法改正 熟慮の契機

崇城大総合教育センター教授
今井 亮佑

2019.3.14

同じ国政選挙ではあるものの、政権選択選挙である衆院選に比べ、そうした意味合いを持たない参院選の投票率は概して低い。中でも、顕著に低くなる傾向にあるのが亥年の参院選である。春の統一地方選、夏の参院選と続くことによる「選挙疲れ」が、選挙運動をする側、される側（有権者）に生じることが、その原因と言われている。

こうした歴史的な傾向からは、今夏の参院選も投票率が伸び悩む可能性がある。ただ、こと今回に関しては、二つの点で重要な意味を持つ選挙であることを心に留めておくべきである。一つは、安倍内閣の政権運営に対する評価を示す機会となる点。もう一つは、憲法改正について「熟慮」する契機となる点である。

自民党は改選議席を維持できるのか。議席を減らす場合、減少幅はどの程度になるのか。自民党をはじめとするいわゆる改憲勢力の議席数は参議院の総定数の3分の2を超えるのか。参院選がどのような結果に終わるかによって、憲法改正の発議の可否、発議する場合の中身が変わってくる。このため今回の参院選は、これまでにも増して重要な意味を持つことになる。

そこで来る参院選を、ふだんの生活の中で考えることのない憲法改正という争点について熟慮する契機とすることを提案したい。自身とは異なる立場に基づく議論も含めて、憲法改正に関する情報を幅広く収集し、自分なりに広い視野から熟慮する。そうすることで、選挙後に展開されるであろう憲法改正をめぐる議論に、確たる立場を持って臨むことができるのである。

2019年3月14日　熊本日日新聞　夕刊　P.1

一筆

みずあかりを共に作ろう

崇城大総合教育センター教授
今井 亮佑

2019.3.28

書きたいことはまだまだいろいろあるが、私の担当は今回までである。最後は「熊本暮らし人まつり　みずあかり」を取り上げたい。

熊本の秋の風物詩としてすっかり定着した感のあるみずあかりは、昨年15回目を迎えた。以前は、ほぼ毎回東京から見に来ていたが、熊本に移った一昨年からは、裏方として携わっている。

運営側に回って初めて気づいたことがある。それは、普通の見物客としてお祭りを見るのと、準備に関わりながら本番を迎えるのとでは、感じ方が全く異なるということである。

ご存じの方もいらっしゃると思うが、飾られる竹のオブジェは全て、市民ボランティアの手による。8月後半から2カ月弱、崇城大学ヘリポートに毎週末集まって、一からオブジェを作り上げていく。その過程で、共に汗を流したボランティア仲間との間に連帯感が生まれるとともに、出来上がったオブジェに対する強い愛着が湧く。このため、お祭り当日、ろうそくに優しい火が点ると、何とも言えない感動を覚えるのである。

私は、この感動をできるだけ多くの方々と共有したいと考えている。特に今年は、ラグビーW杯の熊本会場での試合日とみずあかりの開催日が重なり、海外からの観光客が多く見込まれる特別な年でもある。

既にボランティアの経験をお持ちの方だけでなく、未経験の方にも是非ご参加いただいて、「おもてなし」の心を持ちながら、今年のみずあかりを一緒に作り上げていきたい。

2019年3月28日　熊本日日新聞　夕刊　P.1